

End of Life Careにおける支援概念の固有性

○ 医療法人社団崇仁会 船戸クリニック天音の里 氏名 松久 宗丙 (006214)

キーワード：援助から支援へ ソーシャルワーク ネガティブ・ケイパビリティ

1. 研究目的

End of Life Care では、多（他）職種によるチームアプローチを背景に、どこで最期を迎えるのかではなく、どう生きるのかに着目をし、地域でどのように支援していくのかを考える必要がある。その根底ともいえる支援概念について、生活を包括・統合的にとらえるソーシャルワークの領域においても援助概念や支援概念の枠組みが曖昧で、未だに臨床や学界において基礎理論が構築されていないという実感が脳裏を駆けめぐっている。それは、臨床で目の前の利用者と丁寧に向き合うことと同様に言葉や概念のもつ意味とも真摯に向き合わなければならないことであると痛感している。

そこで、ソーシャルワークの視点から End of Life Care における支援概念について考察することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究では、ソーシャルワークの視点から以下の方法を用いて研究を行う。

- (1) ソーシャルワークの領域に限らず、さまざまな学問領域など先行研究をレビューし、援助概念と支援概念を比較することを通して、ソーシャルワークとしての支援概念を明確にする。
- (2) これまでの継続研究と自らの臨床経験をふまえて、End of Life Care における支援概念の固有性を考察する。

3. 倫理的配慮

本研究は日本社会福祉学会の研究倫理規程にもとづき配慮した。文献研究及び自らの臨床経験をもとに研究をすすめている。なお、利益相反はない。

4. 研究結果

支援概念は、ソーシャルワークの領域において限定的に用いられている概念ではなく、あらゆる学問領域や業種においてもそれぞれの解釈のなかで用いられている。しかし、支援とは何かと明確に概念として確立されているとは言い難いと考えられる。

そこで、援助概念と支援概念を以下のように整理することができた。

- ①【目的】援助では、援助者から要援助者への救済であるのに対して、支援では、利用者の自己実現という価値の実現を目指すことにある。
- ②【主体】援助では、行為者側である援助者にあるのに対して、支援では、利用者を中心

とした利用者主体にある。

- ③【知】援助では、曲解された西洋科学であるのに対して、支援では、西洋科学の知と臨床の知にもとづいている。
- ④【関係】援助では、援助者から要援助者へのトップダウンであるのに対して、支援では、共感を根底に、利用者のエンパワメントやストレングス、レジリエンスに着目した利用者とソーシャルワーカーのパートナーシップにある。
- ⑤【焦点】援助では、要援助者のマイナス面についての問題解決に焦点をあてるのに対して、支援では、利用者のマイナス面からの改善へのプロセスに焦点をあてたプラス面についての課題解決にある。
- ⑥【展開】援助では、援助者の発想と論理であるのに対して、支援では、利用者とソーシャルワーカーが共に生きることを意味する参加と協働にある。
- ⑦【方法】援助では、援助者の根拠のない勘と経験を拠り所としているのに対して、支援では、専門性と科学性のみならず根拠のある経験も含んでいる。
- ⑧【特性】援助では、援助者の指導性に対して、要援助者は受動的な立場になる。支援では、利用者とソーシャルワーカーは、ともに尊厳をもった一人の人間であり、そこには責任性も存在している。このような実存性を重視するところに支援の特性がある。

5. 考察

End of Life Care の“End”には、人生の目的という崇高な意味が込められている。End of Life Care は、人の生きざま・死にざまが遺される者たちの生き方へと伝承していくことであり、そして、遺される者たちの心の中で生き続けることを意味している。そこには、西洋科学の知と臨床の知の両方が不可欠である。西洋科学の知は、普遍性・論理性・客観性を特性とし、エビデンスを重視し人間の生活を客観的にとらえようとしている。臨床の知は、利用者の固有な世界・考え方がること、ものごとは多義的であり、複数の意味やとらえ方ができる多様性であること、相互作用によって生まれるものがあることを重視している。すなわち、臨床の知からの考察は、支援概念において科学性と実存性の止揚を意味していると考えられる。

End of Life Care において、迫りくる死への不安や遺される者たちの心境などへソーシャルワークとしての関わりは、援助ではなく、支援でなければならないといえる。

さらに、End of Life Care においてネガティブ・ケイパビリティの視点は、人生の最終段階において、利用者のみならず、遺される者たちへのグリーフケアにも内包されると考えられる。

参考文献

松久宗丙 (2024) 「ソーシャルワークとしての支援概念の一考察 ―支援の本質―」『ソーシャルワーク支援研究』創刊号,P71－84.